

平成24年度 駒場東邦（国語）

解答と解説

解答

問1	1 厚	2 新規	3 保険	4 成績	5 訪問
問2	2 簡単	3 直接	4 商品	5 展開	6 届
問3	3 班	4 姿	5 宣伝	6 縦	7 エ
問4	4 ウ	5 オ	6 イ	7 ウ	8 オ
問5	5 イ	6 オ	7 ウ	8 エ	9 オ
問6	6 ウ	7 オ	8 エ	9 ウ	10 オ
問7	7 オ	8 エ	9 ウ	10 オ	11 エ
問8	8 ウ	9 オ	10 エ	11 ウ	12 オ
問9	9 オ	10 エ	11 ウ	12 オ	13 エ
問10	10 エ	11 ウ	12 オ	13 エ	14 ウ
問11	11 ウ	12 オ	13 エ	14 ウ	15 エ
問12	12 オ	13 エ	14 ウ	15 エ	16 ウ
問13	13 エ	14 ウ	15 エ	16 ウ	17 オ
問14	14 ウ	15 エ	16 ウ	17 オ	18 エ
問15	15 エ	16 ウ	17 オ	18 エ	19 ウ

- 問1～19の解答
- 問1 早く会いたかったから、うれしいです。
- 問2 弟の出来の良さをうれしく思うことで、取り柄のない自分の平凡さを意識させられ、むなしく感じている」と。
家族の和やかな雰囲気がこわれ始めたこと。
- 問3 自分のふがいなさが両親の不仲を招いているという、思つてもみなかつた事実をつきつけられて大きな衝撃を受け、激しく動搖しながら、一気に深い悲しみの淵に沈んでいる。
- 問4 Aでは深く悲しみ、重く沈んでいた心が、Bでは感動と喜びで軽くなっている。

解説

出典は、柳月美智子「ダリアの笑顔」（光文社）。

問2 「保育園ではいちばん身体が小さくて六年生になった今でも変わらない」と思つてゐる真美は、もし自分が「早生まれ」でなかつたら「早紀ちゃんみたいに明るくて笑顔の女の子」になれたのではないかと考へています。「早紀ちゃんや健介みたい」な子、「ダリアみたいに笑える子」になりたかったという真美の思いはこのあと大きく変化しますが、物語全体の流れに関係する内容ですので、冒頭や中盤の段階で答えは見えません。後半まで読み進み、問13～15のあたりでもう一度確認しましょう。

- 問3 このあと明らかになりますが、真美の弟（健介）は「タウンント・ピックス」という地元の情報誌に掲載されたことで、ちょっととした有名人になっています。母親は「健介のことをほめられて、シンキのお客さんに契約を約束してもらつた」し、真美は学校で「かわいい弟だね」と声をかけられた。近所で話題になるのは恥ずかしいのですが、「あらそ、？」と「鼻歌はじり」で答える母親はさほど嫌がつてゐるようには見えません。（→エ）。
- 問4 「早生まれは損だ」（問2）と思つてゐる真美は、「早紀ちゃんや」健介みたいになりたかったな」と思つています。弟をほめられるのは姉として「本心で」素直にうれしい。その気持ちに嘘偽りはありません。けれども、弟に光が当たれば当たるほど、真美は自分のことがますますふがいなく思えてきて仕方ありません。「健介はあんなに元気なのに健介は絵が上手なのに」と思うと、「それなのに、姉の私ときたら。てんでダメー自慢にもならない」と自分自身を否定する気持ちが強まります。優秀な弟への賞賛と何の取り柄もない平凡な自分への劣等感は裏表の関係にあります。健介に光が当たる度に、影となる真美は溜め息をつくことになります。

- 問5 先生には「もっと積極的に」「もっと明るく」「もっと自信をもって」などと、「もっと」とを連発され、「それを私は伝えるお母さんの言葉のはしばし」にも「しようがない子ねえ」という否定的なニュアンスを感じてしまふ真美は、「いつでも私を『いちばん』だって言ってくれた」おばあちゃんを懐かしみます。「真美ちゃんはほんとうにい子だねえ。なんでも、いちばん。いつどうしよう」と言って優しく抱きかかえてくれたおばあちゃんでしたが、おとし亡くなってしまいました。自分をふがいないと想ひ、気持ちが沈んでいるときに「おばあちゃんに会いたいな」という「センチな気分」が強まります。（→ウ）。

問6・7・9

夕食の時間は平和に過ぎました。父親は「お母さんの作る餃子は世界一だよな」と持ち上げ、「アクリル毛糸スponジ」を「使うのもつたないな」と言つて、編んだ真美を喜ばせます（問9→ウ）。ところが夕食後、「なんで、あなたのところに連絡がいくのよ！」という母親の怒鳴り声が聞こえてきたあたりから、何やら険悪なムードが漂い始めます（↓問6）。どうやら両親がけんかを始めたらしい。「みっともないなあ。俺、もう寝るわ」と関せずの健介とは対照的に、怒鳴り声に耳をふさぎ、興奮した母親が「ドンツ」と机を叩くたびに気の弱い真美はびくびくしてしまいます。ところが、けんかは意外な方向に展開します。「お前がいつもガミガミ言つてもお前に渡してきただらあんななんだ」という父親のことばに真美は耳を疑います。「お前がいつもガミガミ言つてもお前に渡してきただらあんなのか」。真美は父親の目に映つていた自分の姿を知つて大きな衝撃を受け、激しく動搖します。真美は「早生まれ」の自分は何をしてもらはないとしない、駄目な人間だと思つていました。けれども、それはあくまで自分の問題です。誰かに迷惑をかけているわけではなかつたはずですが、父親は真美の消極的な姿勢は母親の厳しい態度に怯えているからだと言います。言つてみれば真美は被害者のようなものなのですが、それでも真美は両親の諍いの原因はふがいない自分にあるのだと責め始めます。「私のせいだ。全部私のせい」と両親の不和の責任を感じ、深い悲しみの底へと沈んでいきます。（↓問7）。母親の態度を責めていた父親でしたが、「真美の気持ちも少しは考えて子供にも良くないに決まつてただろう」と真美を思つて母親を諭しますが（問9→オ）、父親の温かい思いも悲しみに沈む真美の心には届かなかつたようです。

問10 泣き腫らした真美の目に気づいた早紀ちゃんが声をかけてきました。「他の誰も私の目なんて見てなかつたのか、あるいは「気付いても言つてくれる子は誰もいなかつた」中で、早紀ちゃんだけは真美の異変をに気づき、案じてくれます。しかも真美が「笑つてごまか」しても「苦手な女子みたいにしつこく聞いてこない」。「私を励ますような笑顔をしてみせるだけ」の早紀ちゃんは「みんなのことによく見て」必要な手助けをしてくれるような気が利く女の子です。鋭い早紀ちゃんの前で「まかしはきかないだろうと真美が予感していたことは「やっぱり（言われた）」ということばからわかります（↓イ）。

問11・12 目が輝いている様子を表すときには「らんらん」という擬態語が多く使われます（問11→ウ）。また、早紀ちゃんに編みものを教える約束をしたときの「ちょっと恥ずかしかつたけどうれし」い気持ちを表すことばは「なんだかくすぐつたかっただけでもまぶしかつた」のどちらか。この場合、早紀ちゃんの「ダリアの笑顔」に対する思いなら「まぶしい」となりますが、「指きりげんまん」というかわいらしい約束を交わしたことを受けていますので、「くすぐつたい」があてはまります（問12→イ）。

問13 どうやら「昨日あのあと、眠れなかつた」らしい母親は、夫と言ひ争つたことについて一晩かんがえたのでしょうか。真美が髪を短くしたのは「自分だとなかなか上手く結べないから。母親が働き始め、子どもたち（特に真美）を省みなくなつたことの影響はこういうささいな変化に表れます。髪を三つ編みにしながら、ゆつくりと話をする母娘の幸せな時間は、母親が仕事を始めると同時に消えてしまつました。母親が手伝つてくれなくなつたことに文句も言わず、でも自分では上手く結べない真美は、母親に見えないところで一人泣きべそをかいていたかもしれません。そして、母親に相談せずに自分で短く切ることにした……。今さらながらそんなことに気づいた母親は、放つたらかしにされた娘のさびしさやそれに気づかなかつた自分のうかつさを思い、心を痛めています。

問2・8・14・15 放つたらかしにされていたといふのに、真美は具合の悪そうな母親を気づかいます。母親が「昨日あのあと、眠れなかつた」のは自業自得であるのに、真美は「それって私のせいだ」とやはり自分を責めます。けれども、今日の真美は両親の口論に耳を塞ぎながら自分を責め続けていた昨晚の真美とは違います。「早生まれ」の真美は何をしてもぱつとしない自分に自信を持てずにいました（問2）。「お父さんとお母さんがケンカするのも、お母さんが機嫌悪いのも」、すべてはふがいない自分が悪いのだと思い、深く傷つき、悲しんでいました（問8→A）。そんな真美を一冊のノートが救います。真美が生まれたときの様子や母親の思いが克明に記された「育児日記」を読んだ真美は、自分が望まれて母親のもとに生まれたことを知り、感動します。雲一つない快晴の空の下に生まれたこと、「真の心が美しい子に育つよう」、という名前に込められた両親の願い、「女の子が欲しかつたらうれしい」という母親の思い……一つ一つが傷ついた真美の心を癒していくります。そして、真美が予定日よりも早く生まれてきたことについて、母親は「早く会いたかったから、うれしいです」と書いています……（↓問2）。真美が自分に自信が持てない根本的な理由は早産だった結果「早生まれ」となつてしまい、「保育園でいちばん身体が小さくおもしろくなつた」ところにありました。ところが、母親は自分（真美）が予定日よりも早く生まれたことを手放して喜び、涙を流しながら「本当に生まれてきててくれてありがとうございます」と感謝の言葉を綴っています。無条件の愛を注いでくれていたのはおばあちゃんだけではないことを知つた真美の心は喜びと感動でいっぱいになります（問8→B）。生まれたばかりの真美を優しく抱き、愛おしそうに見つめる十一年前の若い母親の姿を見たことで、自分が母親から愛されているのだという安心感に包まれた真美は、少しずつ母親との心の絆を取りもどし、自分を愛し、苦労して育ててくれた「四十一歳のお母さん」を温かい気持ちとともに勞ります（問14→ア）。